

## 理系修士留学生の日本語学習

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学国際連携推進機構 公開日: 2023-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袴田, 麻里 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00029370">https://doi.org/10.14945/00029370</a>

## 理系修士留学生の日本語学習

袴田 麻里

### 【要 旨】

理系修士課程に入学する留学生（英語コースを含む）を対象に、日本語学習状況を調査した。多くは、第1学期に日本語科目を受講するが、修了しない。日本語学習の重要性は理解していても研究との両立が難しいことが推測される。一方で、日本語科目受講のパターンから、第1学期に日本語科目を受講し修了した学生は、第2学期以降も継続して日本語科目を受講し、修了する割合が高いことが分かった。学習意欲を維持し、第1学期に受講した日本語科目を修了できるよう、オンデマンドを併用したコース設計、渡日前日本語教育の実施、日本語科目の単位修得を奨学金申請の申請条件の一部とするなど、新しい試みを2021年度より始めた。今後、これらの試みの効果を検証していく必要がある。

【キーワード】 理系修士留学生、第1学期、学習意欲、研究活動との両立

### 1. はじめに

日本社会は現在、少子高齢化による人口減、産業構造の転換、地域格差等、さまざまな課題を抱えており、これらの課題を解決する一つの方法として、海外から高度人材を留学生として受入れ、日本定着を促す方策をとっている。留学生受入れは、「留学生30万人計画」（2019年に達成）で卒業後にも配慮した受入れ態勢を打ち出し、「留学生受入れ促進プログラム」「留学生就職促進プログラム」などにより、高度人材としての留学生の誘致が積極的に推進されている。在留面でも「高度人材ポイント制」を活用し、出入国管理上の優遇措置を打ち出しており、今後も高度人材として留学生の受入れ、定着を促進する流れは止まらないだろう。

静岡大学は、2013年度国立大学改革強化推進補助金を得て、2015年度にアジアブリッジプログラム（以下、ABP）を開始した。プログラム設置の目的の一つは、国際展開を進める静岡県内企業にニーズの高い東南アジア、南アジアの国々から優秀な留学生を受入れ、日本とアジアの懸け橋となる「アジア人材育成拠点」を構築し、静岡大学の教育・研究の国際化を地域とともに推進する（注1）ことであり、大学と自治体、各種団体等が協力、連携してプログラムを実施してきた。プログラムは学士課程と修士課程に開講されている。修士課程ではこのプログラムを英語コースに置くことで、大学院の教育と研究の国際化を図るとともに、日本語による教育課程では受け入れが難しい非漢字圏の国々からの理系留学生受入れが可能になった。

このようにして日本語力不問で留学生を受け入れることが可能になったが、日本語未習、または日本語力が著しく低い留学生の場合、学内外でコミュニケーションに支障を来すと同時に、日本語力が低いことで進路が制限される恐れがある。

日本語力は、優秀な外国人人材が自ら進路を選択する際に、日本での就職を選択肢に追加する大きな要因だと考えられる。本稿では、入学者が効率的に日本語力を向上させ、卒業後の進路の幅を広げられるよう、彼らの日本語学習状況を調査し、理系修士課程の英語コースで受入れる留学生の日本語教育のあり方を考察する。

## 2. 理工系修士課程の概要

静岡大学では、2015年度に理工系4研究科15専攻を、1研究科4専攻に統合し、横断的な教育プログラムの提供を可能とする教育体制、総合科学技術研究科（以下、総科研）が発足した。静岡大学は、静岡キャンパス（以下、静岡C）と浜松キャンパス（以下、浜松C）に分かれており、総科研所属の農学・理学専攻の学生は静岡C、工学・情報学専攻の学生は浜松Cに在籍している。

総科研は、2015年度のABP開始を受け、英語で授業、ゼミ活動、実験などを行い学位が取得できる10月入学の英語コースを設置した。2014年度以前も理工系4研究科には4月入学・10月入学の課程はあったが、2015年度に英語コースを設置したことにより積極的な留学生受入れが始まった。英語で学位が取得できる体制は、博士課程で2006年度より整えられていたが、修士課程では総科研が初めてである。10月入学の英語コース入学者のうち、静岡大学が指定する16カ国の学生は、ABP留学生として受け入れる（注2）。ABP開始前の2014年度の理学・情報学・工学・農学研究科の在籍者数と、2015年度以降の総科研在籍者数の推移は表1のとおりである。

【表1】総科研在籍者数と留学生の割合（各年度5月1日現在）

	留学生在籍数	全在籍者数	留学生の割合
2014年	47	1054	4.5%
2015年	39	1067	3.7%
2016年	86	1150	7.5%
2017年	116	1189	9.8%
2018年	99	1177	8.4%
2019年	110	1158	9.5%
2020年	104	1181	8.8%
2021年	99	1173	8.4%
2022年	91	1192	7.6%

(参考)

2022年学士	153	8472	1.8%
2022年博士	86	175	49.1%

## 3. 日本語科目について

数年間の日本での生活に必要な日本語力を身につけたいという留学生のニーズに応え、

静岡大学ではABP開始前から国際連携推進機構が外国人留学生（正規生、非正規生）対象の日本語科目を開講している。修士留学生は、指導教員および所属専攻長の許可を得て、大学教育センターが開講する全学教育科目「日本語・日本文化研修科目」「留学生科目」を受講できる（表2）。ただし、修得した単位は修士課程を修了するための単位には算入されない。日本語科目は、基本的に静岡Cでも浜松Cでも同じ科目が開講される。

日本語1～5は、日常生活に必要なコミュニケーションができるようになることを目的とする15週間の日本語コースである（注3）。レベルは入門から上級まで5段階に分かれており、初心者を対象とする入門（科目名は「日本語1」）は週4コマ、初級（同「日本語2」）は週3コマ、中級前半（同「日本語3」）と中級後半（同「日本語4」）は技能別に3科目開講されており週に各1コマ、上級（同「日本語5」）も技能別に2科目開講で週に各1コマである。1コマは90分である。日本語3以上では、研究活動に必要な口頭発表やレポート執筆の技能などの練習も行う。日本語5は静岡キャンパスのみの開講で、浜松Cの上級レベルの日本語力を持つ留学生は、日本語5の代わりに留学生科目を受講する。成績は、80%以上出席し所定の試験を受験した上で、S「秀」、A「優」、B「良」、C「可」及びD「不可」で表される。出席率が80%に満たなければ成績はDとなるが、日本語1は授業回数が多いため67%以上の出席を満たすことが要件である。

日本語初級、日本語中級は集中コースである（注4）。日本語初級は週15コマ、日本語中級は週10コマを1コースとして文法や語彙、作文、会話など15週間かけて学ぶが、特定の科目は単独でも履修できる。成績は、80%以上出席し所定の試験を受験した上で、S「秀」、A「優」、B「良」、C「可」及びD「不可」で表される。出席率が80%に満たない場合、成績はDである。

留学生科目は、日本人と同様に勉学生活を進められるよう、アカデミック・ジャパニーズを身につけることを目標とする科目である。プレゼンテーション、レポート作成、ディスカッション、ビジネス日本語などが主な学習内容で、日本語力が高い学部留学生を受講対象とするが、学部留学生と同等の日本語力を持つ研究留学生も受講する。

【表2】日本語科目の概要 （1コマ=90分）

	日本語・日本文化研修科目		留学生科目
日本語レベル	入門、初級、中級前半、中級後半、上級（注2）	初級、中級（注3）	上級
科目と授業数	日本語1：週4コマ×15週 日本語2：週3コマ×15週 日本語3：各クラス週1コマ×15週	日本語初級(*)：週15コマ×15週 日本語中級(**)：週10コマ×15週	日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語Ⅲ 日本語Ⅳ 日本語Ⅴ 日本語Ⅵ 日本事情

	日本語4：各クラス週1 コマ×15週 日本語5(*)：各クラス週 1コマ×15週		いずれも週1コマ×15週
成績	<ul style="list-style-type: none"> <li>80%以上出席し所定の試験を受験（日本語1のみ67%以上）。</li> <li>S「秀（90～100点）」、A「優（80～89点）」、B「良（70～79点）」、C「可（60～69点）」及びD「不可（59点以下）」。</li> </ul>		それぞれの科目で定めるところによる。

(\*)静岡Cでのみ開講、(\*\*)浜松Cで後期のみ開講

#### 4. 修士留学生の日本語科目受講

##### 4.1. 学期別受講状況

表3は、総科研所属の留学生数と入学者数、日本語科目受講者数を示したものである。

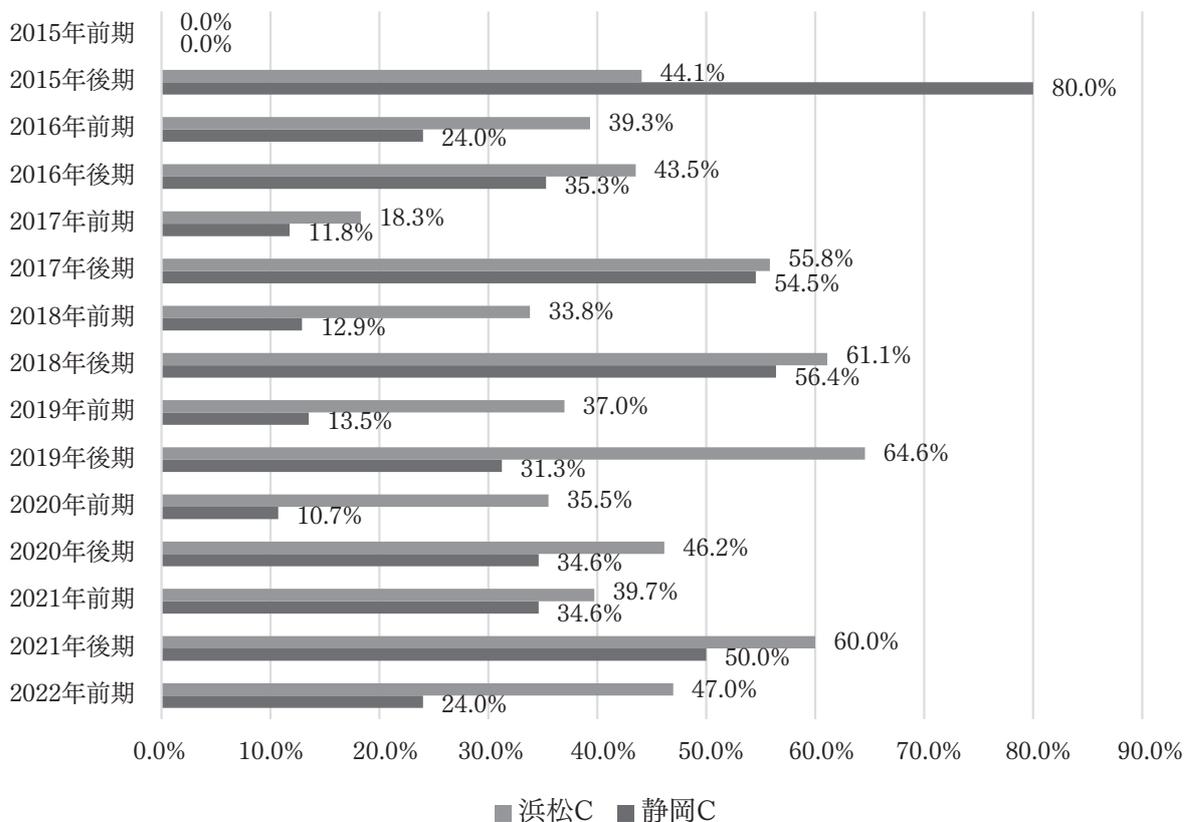
留学生数は2015年度後期以降、100名前後を維持している。入学時期は、4月が54名、10月が319名で、圧倒的に10月入学者が多い。日本語科目受講者数は、4月開始の前期は少なく、10月開始の後期は多い。キャンパス別に見ると、留学生数はどの学期も浜松Cのほうが静岡Cより多い。入学者数は2022年前期を除いて、浜松Cの方が多い。また日本語科目受講者数も浜松Cの方が多いことが分かる。

総科研の留学生在籍者数に対する受講割合（図1）を見ると、受講者数と同様、前期より後期の受講率が高い。キャンパス別には、2015年度後期を除き、静岡Cより浜松Cの方が受講率が高いことが分かった。

【表3】総科研所属の留学生数と入学者数、日本語科目受講者数（2015年前期～2022年前期）

	留学生在籍者数（人）			留学生入学者数（人）			受講者数（人）		
	静岡	浜松	合計	静岡	浜松	合計	静岡	浜松	合計
2015年前期	11	28	39	2	6	8	0	0	0
2015年後期	25	59	84	18	35	53	21	26	47
2016年前期	25	61	86	4	14	18	6	24	30
2016年後期	34	85	119	10	30	40	12	37	49
2017年前期	34	82	116	2	3	5	4	15	19
2017年後期	33	77	110	17	27	44	18	43	61
2018年前期	31	68	99	1	5	6	4	23	27
2018年後期	39	72	111	19	34	53	22	44	44
2019年前期	37	73	110	1	5	6	5	27	27
2019年後期	32	79	111	10	34	44	10	51	51
2020年前期	28	76	104	1	4	5	3	27	30
2020年後期	26	78	104	14	30	44	9	36	45
2021年前期	26	73	99	1	4	5	9	29	38
2021年後期	24	70	94	9	32	41	12	42	54
2022年前期	25	66	91	1	0	1	0	31	31

【図1】：キャンパス別 日本語科目受講割合（％）



#### 4. 2. 入学形態別受講状況

総科研が充足した2015年度前期から2022年度前期までの留学生の日本語受講状況を入学別（表4）に見ると、学士課程からの進学者は28名（静岡C 2名・浜松C 26名、4月入学13名・10月入学15名）すべてが私費生であり、日本語科目受講者はいない。学士課程では、日本語で講義・実験・実習等の研究指導が日本人学生と同様に行われる。学士課程からの進学者は十分な日本語力を身につけており、総科研入学後に日本語科目受講の必要はないと言える。

一方、研究生や特別聴講学生としての在籍を経て、総科研に入学した留学生は、国費生2名を含む40名（静岡C 15名・浜松C 25名、4月入学29名・10月入学11名）である。総科研入学後に1科目以上の日本語科目を受講した人数は12名（静岡C 4名・浜松C 8名）であった。受講率は、3割程度でそれほど高い割合ではない。ただし国費生は、在籍数は少数ながら全員が受講している。総科研入学前に研究生や特別聴講学生として在籍した期間の日本語科目履修を調べてみたところ（表5）、40名のうち20名が履修しており、受講者数は4月入学者が29名中16名、10月入学者は11名中4名だった。入学後も継続して日本語科目を受講した学生は8名（4月入学7名、10月入学1名）で、受講しない学生の方が多い（4月入学9名、10月入学3名）。また、15名（4月入学11名、10月入学4名）は研究生等から総科研卒業までの静岡大学在籍期間中、一度も日本語科目を受講しなかった。

2. で述べたように、英語コースは10月入学の課程で、入学試験は英語で実施される。一方で、4月入学の課程には英語コースはなく、入学試験は日本語で実施される。そのため、研究生等の身分を経て4月に入学した留学生29名は、日本語で受験する必要がある、研究生等として在籍する前に受験に必要な日本語力を持つ、あるいはある程度の日本語力を持って研究生等として在籍し、その期間に日本語科目を履修し日本語力を高めてから入学したと推測される。

【表4】入学別の日本語受講者数と受講割合（2015年前期～2022年前期）

		全体			静岡C			浜松C		
		在籍者	受講者	受講率	在籍者	受講者	受講率	在籍者	受講者	受講率
合計		378	275	73%	112	84	75%	266	191	72%
学士課程 から進学	国費生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	私費生	28	0	0%	2	0	0%	26	0	0%
	合計	28	0	0%	2	0	0%	26	0	0%
研究生等 経由して 入学	国費生	2	2	100%	1	1	100%	1	1	100%
	私費生	35	10	29%	11	3	27%	24	7	29%
	特別聴講学生	3	0	0%	3	0	0%	—	—	—
	合計	40	12	30%	15	4	27%	25	8	32%
直接入学	国費生	16	14	88%	12	11	92%	4	3	75%
	私費生	286	242	85%	81	68	84%	205	174	85%
	外国政府派遣生	8	7	88%	2	1	50%	6	6	100%
		310	263	85%	95	80	84%	215	183	85%

【表5】研究生等期間を含む日本語科目受講者数（2015年前期～2022年前期）

入学月	4月	10月
入学者数	29	11
入学前に受講	16	4
入学後に受講	7	1
入学後に非受講	9	3
入学前に非受講	13	7
入学後に受講	2	3
入学後に非受講	11	4

総科研に直接入学した留学生は、310名（静岡C95名・浜松C215名）であり、総科研に入学した留学生の82%を占める。学士課程からの進学者や研究生等を経由しての入学者とは異なり、総科研在籍中に日本語科目を1科目以上受講する留学生は国費生、外国政府派遣生、私費生とも極めて多く、静岡Cでは80名（受講率は84%）、浜松Cでは183名（同85%）である。入学時期は、4月入学が11名、10月入学が299名と、10月入学者が大半を占める。10月入学は、入学試験、講義、研究活動などが英語で行われる英語コースで、学位取得や研究活動に日本語は要求されないのだが、日本語科目受講者は極めて多いという結果であった。

### 4. 3. 在籍期間別受講状況

次に、2015年4月から2020年10月までの総科研入学者のうち、日本語科目受講者253名が在籍期間の2年間に、いつ、どの科目を履修したかを示す(表6)。1年目の前半を第1学期、後半を第2学期、2年目の前半を第3学期、後半を第4学期とする。

【表6】在籍期間別の日本語受講者・修了者数(2015年前期～2020年前期)

S=静岡C、H=浜松C、①=日本語1、②=日本語2、③=日本語3、④=日本語4、⑤=日本語5(または留学生科目)

在籍学期		第1学期																	
クラス		全体	S	H	①	S	H	②	S	H	③	S	H	④	S	H	⑤	S	H
受講者総数		240	76	162	175	66	109	21	4	17	22	1	21	21	5	14	1	0	1
修了者総数		123	31	90	82	27	55	12	2	10	14	0	14	14	2	10	1	0	1
修了率(%)		51	41	56	47	41	50	57	50	59	64	0	67	67	40	71	100	-	100
研究生等經由して入学	受講者	13	4	7	1	0	1	1	1	0	3	0	3	8	3	3	0	0	0
	修了者	7	1	4	0	0	0	0	0	0	1	0	1	6	1	3	0	0	0
直接入学	受講者	227	72	155	174	66	108	20	3	17	19	1	18	13	2	11	1	0	1
	修了者	116	30	86	82	27	55	12	2	10	13	0	13	8	1	7	1	0	1

在籍学期		第2学期																	
クラス		全体	S	H	①	S	H	②	S	H	③	S	H	④	S	H	⑤	S	H
受講者総数		141	23	118	25	1	24	77	17	60	25	3	22	12	2	10	2	0	2
修了者総数		63	7	56	9	0	9	30	6	24	17	1	16	5	0	5	2	0	2
修了率(%)		45	30	47	36	0	38	39	35	40	68	33	73	42	0	50	100	-	100
研究生等經由して入学	受講者	6	3	3	0	0	0	2	1	1	2	1	1	2	1	1	0	0	0
	修了者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
直接入学	受講者	135	20	115	25	1	24	75	16	59	23	2	21	10	1	9	2	0	2
	修了者	63	7	56	9	0	9	30	6	24	17	1	16	5	0	5	2	0	2

在籍学期		第3学期																	
クラス		全体	S	H	①	S	H	②	S	H	③	S	H	④	S	H	⑤	S	H
受講者総数		98	11	87	8	3	5	35	7	28	35	0	35	20	1	19	0	0	0
修了者総数		32	2	30	1	0	1	4	2	2	17	0	17	10	0	10	0	0	0
修了率(%)		33	18	34	13	0	20	11	29	7	49	-	49	50	0	53	-	-	-
研究生等經由して入学	受講者	3	2	1	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0
	修了者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
直接入学	受講者	95	9	86	8	3	5	34	6	28	34	0	34	19	0	19	0	0	0
	修了者	32	2	30	1	0	1	4	2	2	17	0	17	10	0	10	0	0	0

在籍学期		第4学期																	
クラス		全体	S	H	①	S	H	②	S	H	③	S	H	④	S	H	⑤	S	H
受講者総数		32	3	29	2	0	2	7	1	6	11	2	9	12	0	12	0	0	0
修了者総数		8	0	8	0	0	0	1	0	1	5	0	5	2	0	2	0	0	0
修了率(%)		25	0	28	0	-	0	14	0	17	45	0	56	17	-	17	-	-	-
研究生等經由して入学	受講者	2	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
	修了者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
直接入学	受講者	30	2	28	2	0	2	6	0	6	11	2	9	11	0	11	0	0	0
	修了者	8	0	8	0	0	0	1	0	1	5	0	5	2	0	2	0	0	0

受講者が最も多いのは、第1学期の240名で、次いで第2学期に141名、第3学期に98名、第4学期が最も少なく32名である。学期が進行するにつれて受講人数が減少している。

受講する科目は、第1学期は日本語1（入門レベル）が最も多く175名、日本語3（中級前半）は22名、日本語2（初級）と日本語4（中級後半）は21名ずつ、日本語5（上級）受講者は1名である。第2学期は、日本語2が77名で最も多く、次いで日本語1と日本語3が25名ずつ、日本語4が12名、日本語5が2名の順である。第3学期は、日本語2と日本語3が35名ずつで最も多く、次いで日本語4が20名、日本語1が8名、日本語5の受講者はいない。第4学期は、日本語4が12名で最多、次いで日本語3が11名、日本語2が7名、日本語1が2名の順で、日本語5受講者はいない。

一方、修了率を見ると、第1学期は51%、第2学期は45%、第3学期は33%、第4学期は25%であり、どの学期も高いとは言えない。また、受講者数と同様に学期が進行するにつれて下がっている。

科目別に見ると、修了率は日本語力が低いレベルよりも高いレベルの科目の方が高い傾向がある。第1学期は、日本語5（100%）、日本語4（67%）、日本語3（64%）、日本語2（57%）、日本語1（47%）の順である。第2学期は、日本語5（100%）、日本語3（68%）、日本語4（42%）、日本語2（39%）、日本語1（36%）の順である。第3学期は、日本語4（50%）、日本語3（49%）、日本語1（13%）、日本語2（11%）の順である。第4学期は、日本語3（45%）、日本語4（17%）、日本語2（14%）、日本語1（0%）の順である。

キャンパス別に見ると、第3学期日本語2を除いて、修了率は静岡Cより浜松Cの方が高い。

#### 4. 4. 日本語科目受講・修了のパターン

2015年4月から2020年10月までの入学者で、日本語科目受講者253名について、2年間の日本語科目受講状況と修了状況を調べてみたところ、93通りのパターンが検出された。本稿では、受講人数の多い第1学期に日本語1を受講する43パターン（表7）と、日本語2を受講する14パターン（表8）を報告する。

最も多いのは、第1学期に日本語1を受講し、修了しないパターンで50名である（静岡C30名・浜松C17名）。次に多いのは、第1学期に日本語1を修了し、その後日本語科目を受講しないパターンで17名（同、13名・4名）である。この他に10名以上が該当するのは、第1学期に日本語1を受講・修了し、第2学期に日本語2を受講したものの修了しないパターンが13名（6名・7名）、第1学期に日本語1を修了せず、第2学期に日本語2を修了しないパターンが12名（4名・8名）であった。少なくとも92名の日本語科目受講期間は1年未満であり、そのうちの67名は入学後半年しか日本語科目を受講していないことが明らかになった。

次に科目別の受講者、修了率を述べる。第1学期の日本語1受講者175名（66名・109名）のうち、修了者は82名（27名（41%）・55名（50%））である。第2学期の継続受講者は61名（11名・50名）で、静岡Cでは日本語1修了者の41%が、また浜松Cでは91%が日本語科目受講を継続した。そのうち修了者は26名（5名・21名）で、修了率はそれぞれ

れ45%、48%である。第3学期は、第1学期の日本語1修了者のうち45名（6名・39名）が受講したが、修了者は静岡Cは1名（17%）、浜松Cでは18名（17%）であった。最終学期となる第4学期は、静岡の受講者1名は修了できず、浜松Cでは受講者14名のうち4名が修了した（29%）。

一方、第1学期に日本語1を受講したものの修了できなかった受講者93名（同39名、54名）の、その後の受講状況を見たい。93名のうち、37名（5名（13%）・32名（59%））は第2学期にも日本語科目を受講したが、修了したのは静岡Cで1名（20%）、浜松Cでは9名（28%）に過ぎない。第3学期には、静岡Cで1名受講したものの修了できず、浜松Cでは24名受講し3名が修了した（12%）。最終学期の第4学期は、静岡では受講者はおらず、浜松Cでは6名受講し2名が修了した（33%）。

【表7】日本語1受講・修了パターン

（○）＝修了、「×」＝修了せず、「－」＝受講せず）

番号	第1学期	第2学期	第3学期	第4学期	静岡(名)	浜松(名)	全体(名)
1	日本語1○	－	－	－	13	4	17
2	日本語1○	日本語2○	－	－	2	3	5
3	日本語1○	日本語2○	日本語2○	－	1	0	1
4	日本語1○	日本語2○	日本語2×	－	2	1	3
5	日本語1○	日本語2○	日本語3○	－	0	5	5
6	日本語1○	日本語2○	日本語3×	－	0	3	3
7	日本語1○	日本語2○	日本語3○	日本語4○	0	2	2
8	日本語1○	日本語2○	日本語3○	日本語4×	0	2	2
9	日本語1○	日本語2○	日本語3×	日本語4×	0	2	2
10	日本語1○	日本語2○	日本語4○	－	0	1	1
11	日本語1○	日本語2○	－	日本語3○	0	2	2
12	日本語1○	日本語2×	－	－	6	7	13
13	日本語1○	日本語2×	日本語2×	－	0	5	5
14	日本語1○	日本語2×	日本語3○	－	0	4	4
15	日本語1○	日本語2×	日本語3×	－	0	6	6
16	日本語1○	日本語2×	日本語2×	日本語2×	0	1	1
17	日本語1○	日本語2×	日本語2×	日本語3×	0	1	1
18	日本語1○	－	日本語2×	日本語3×	1	0	1
19	日本語1○	日本語2×	日本語3○	日本語3×	0	1	1
20	日本語1○	－	日本語1×	－	1	0	1
21	日本語1○	－	日本語2×	－	1	0	1
22	日本語1○	日本語3○	日本語4×	日本語4×	0	1	1
23	日本語1○	日本語3○	日本語4○	日本語4×	0	1	1
24	日本語1○	日本語3○	日本語4○	－	0	1	1
25	日本語1○	日本語3×	日本語4○	－	0	1	1
26	日本語1○	－	日本語2×	日本語2×	0	1	1
27	日本語1×	－	－	－	33	17	50
28	日本語1×	日本語1○	日本語2×	－	0	6	6
29	日本語1×	日本語1○	日本語2○	日本語3○	0	1	1
30	日本語1×	日本語1×	－	－	0	5	5
31	日本語1×	日本語1×	日本語2×	－	0	4	4
32	日本語1×	日本語1×	日本語2×	日本語2×	0	1	1
33	日本語1×	日本語1×	日本語2×	日本語3×	0	1	1
34	日本語1×	日本語2○	－	－	1	0	1
35	日本語1×	日本語2○	日本語2×	－	0	1	1
36	日本語1×	日本語2○	日本語3○	日本語3×	0	1	1
37	日本語1×	日本語2×	－	－	4	8	12
38	日本語1×	日本語2×	日本語3×	－	0	2	2
39	日本語1×	日本語2×	日本語2○	日本語3○	0	1	1
40	日本語1×	日本語3×	日本語4×	－	0	1	1
41	日本語1×	－	日本語1×	－	1	3	4
42	日本語1×	－	日本語2×	－	0	1	1
43	日本語1×	－	日本語2×	日本語2×	0	1	1
合計					66	109	175

表8を見ると、第1学期の日本語2受講者は20名（3名・17名）で、そのうち、修了者は12名で修了率は60%である（2名（67%）・10名（59%））。第2学期の継続受講者は10名（2名、8名）で、そのうち修了者は7名（1名・6名）、修了率はそれぞれ50%、75%である。第3学期は、第1学期の日本語2修了者のうち5名（0名・5名）が受講したが、修了者は1名であった。最終学期となる第4学期は2名（1名・1名）だったが、修了者はいなかった。

一方、第1学期に日本語2を受講したものの修了できなかった受講者は8名（同1名・7名）である。このうち、浜松Cの3名は第2学期に日本語3を受講し、3名とも修了した。第3学期には、静岡Cの受講者はおらず、浜松Cの2名が日本語2、日本語4をそれぞれ受講したが両名とも終了できなかった。最終学期の第4学期も、静岡Cは受講者はおらず、浜松Cで1名が日本語2を受講したが修了できなかった。

【表8】日本語2受講・修了パターン

（「○」＝修了、「×」＝修了せず、「－」＝受講せず）

番号	第1学期	第2学期	第3学期	第4学期	静岡(名)	浜松(名)	全体(名)
44	日本語2○	－	－	－	0	1	1
45	日本語2○	日本語2○	日本語3×	－	0	1	1
46	日本語2○	日本語3○	－	－	0	2	2
47	日本語2○	日本語3○	日本語3×	－	0	1	1
48	日本語2○	日本語3○	日本語4×	－	0	1	1
49	日本語2○	日本語3○	－	日本語3×	1	0	1
50	日本語2○	日本語3○	日本語3○	日本語4×	0	1	1
51	日本語2○	日本語3×	－	－	1	2	3
52	日本語2○	－	日本語3×	－	0	1	1
53	日本語2×	－	－	－	1	2	3
54	日本語2×	日本語3○	－	－	0	2	2
55	日本語2×	日本語3○	日本語4×	－	0	1	1
56	日本語2×	－	日本語2×	－	0	1	1
57	日本語2×	－	－	日本語2×	0	1	1
合計					3	17	20

日本語1は、第1学期に非常に多くの学生が受講するが、修了者は半数に満たない。修了した場合も、修了しない場合も、第2学期、第3学期、第4学期では受講者が減っている。修了率を計算してみると、第1学期に日本語1を修了した学生の方が、修了しなかった学生よりも第2学期の受講において修了率が高いことが分かった。

日本語2は、第1学期の受講者数は少ないが、修了率は高い。日本語1と同様、修了した場合も、修了しない場合も、第2学期以降は受講者が減っているが、第1学期に日本語2を修了した学生の方が、修了しなかった学生よりも第2学期の受講において修了率が高い。

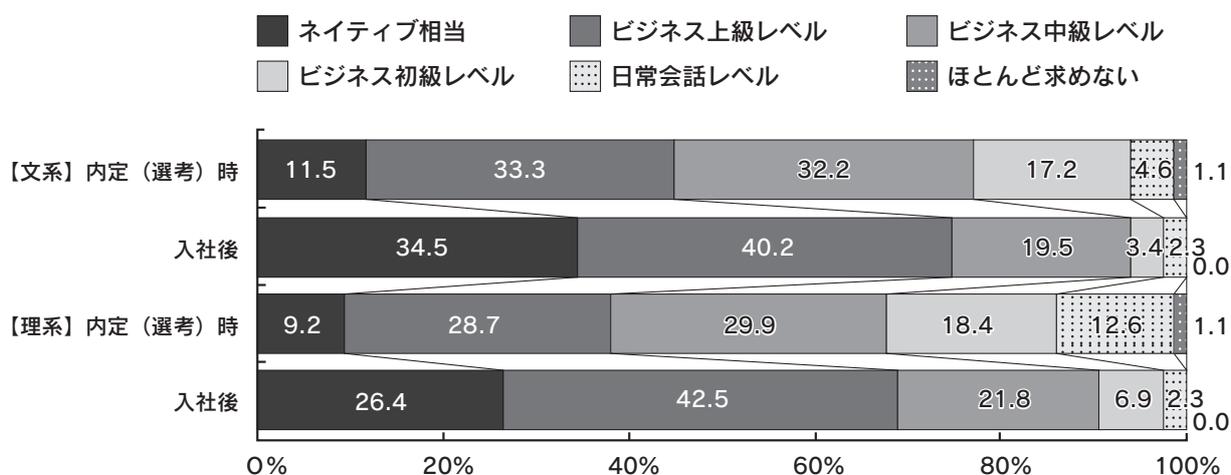
日本語未習、または日本語力が著しく低い留学生を対象とする日本語1、日本語2の受講において、第1学期の受講科目の修了が、第2学期の受講継続と修了に影響を与えている可能性がある。

### 5. 理系の修士留学生が日本語を受講する理由、受講しない理由

静岡大学の理系修士課程、総科研に在籍する留学生は、学位取得において日本語は不要であるものの、日常生活（買い物や移動など）や日本人学生との日常会話等では日本語で

対応せざるを得ない場合が多い。研究室における研究活動は英語で遂行可能だが、研究室の外では英語での情報提供が極端に少ないためである。国際連携推進機構では、このような学生たちのニーズに応え、日常的なコミュニケーションができるようになることを目標にコースを設定し運営してきたが、今回の調査からは、入学し日本語力向上の必要性を感じて受講したものの、何らかの要因で修了できない学生が多いことが明らかになった。

【図2】外国人留学生の内定（選考）時・入社後に求める  
日本語コミュニケーションレベル



ネイティブ相当	=	どのようなビジネス場面でも日本語による十分なコミュニケーション能力がある
ビジネス上級レベル	=	幅広いビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力がある
ビジネス中級レベル	=	限られたビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力がある
ビジネス初級レベル	=	限られたビジネス場面で日本語によるある程度のコミュニケーション能力がある
日常会話レベル	=	限られたビジネス場面で日本語による最低限のコミュニケーション能力がある
ほとんど求めない	=	日本語によるビジネスコミュニケーション能力はほとんどない

（ディスコ（2021）「外国人留学生／高度人材採用に関する企業調査」）

また、最近の傾向として、日本での就業を希望する理系修士留学生が増えている。所属する専攻により違いはあるものの、日本で日本企業への就職を希望する割合は、博士課程進学に次いで多い（ライアン2018）。しかしながら、留学生の採用を希望する企業が理系の留学生に求める日本語コミュニケーションレベルは高く（図2）、約9割の企業が選考を「すべて日本語で実施」しており、就職活動の段階から、高い日本語力を有していることを求める企業が多いことが報告されている（ディスコ2021）。

このように、日常生活でのニーズ、卒業後のニーズがあり、また日本語学習の機会が提供されていながら、総科研に在籍する留学生の日本語科目受講率、修了率は決して高いとは言えない。日本語受講率が低い理由は、英語で学位を取得するという制度上、専門の講義や研究に日本語が不要であることが第一に挙げられる（田崎他2010）。また、その言語を話す人々が近くにあまりいないような状況では道具的動機づけが重要とも言われている（佐々木2007）。総科研に在籍する留学生は日本語を話す人々が近くにいる状況であるが、

日本語使用がなくても留学の主目的である学位取得・研究活動に支障がない。その結果、日本語を話す人々が近くにあまりいない状況に類似した目標言語環境にあり、日本語を学習する動機がさらに弱くなると考えられる。

学習動機が弱いことに加え、日々の研究活動に多くの時間と労力を割いていることも、日本語受講が難しくなる大きな理由である。総科研に在籍する留学生は、一日平均10.3時間をキャンパスで過ごし、そのうち研究室で過ごす時間は7.3時間である(ライアン 2018)。一日平均11時間を研究に費やしている博士課程の留学生(ライアン 2014)と比較すると短時間に感じられるが、修士課程は博士課程よりも履修すべき科目が多く、また修学期間は博士課程よりも1年短いことを考えると、むしろ博士生よりも研究活動に費やす労力や時間は多い可能性がある。

日本語科目の受講パターンから、日本語力が著しく低い修士留学生の多くは、第1学期に日本語科目を受講していることが分かった。生活上の必要を感じ、研究活動が本格化していない来日直後に受講しているのだと思われるが、修了率をみると、修士課程での勉学・研究と並行して日本語授業に恒常的に出席することが困難であることがうかがえる。多くの留学生が受講する日本語1、日本語2は、どちらかと言えば演習的な授業である。そのため、出席が学習の進み方に大きく影響を与えるが、研究を優先すると日本語授業を欠席せざるを得ない。第1学期に日本語力の重要性を認識し、第2学期、第3学期に再度受講しても、第1学期よりも研究に時間を費やすことが多く受講を断念、結果として日本語力は低いまま留まることになる。

日本語未習(日本語1を受講)、あるいは入門レベル(日本語2を受講)で来日し、入学後に日本語科目を受講して日本語3(中級前半)以上に進んだ受講者は、35名に留まる。日本語科目受講以外にも、日本で生活する中で日本語を学ぶ機会はあるが、前述したように一日の大半をキャンパス内で過ごし、彼らのほとんどが大学の留学生寮に住んでいることを考えると、日本語科目受講以外で日本語を学ぶ機会は限られている。2年間日本語科目を受講することは難しいとしても、今回の調査から、第1学期に受講した科目を修了することで、第2学期に科目を受講し修了する割合が高まることが推測される。第1学期の受講科目修了を確実にする方策が必要である。

## 6. 理系修士留学生の日本語科目受講を促すために

2015年に総科研で英語コースが発足して以降の留学生の日本語科目受講状況から、多くの留学生が日本語学習と研究との両立に困難であること、また、第1学期の受講がその後の日本語科目受講に影響があることが推察された。受講者の多くは、日本語学習の意向を持ちながらも修了要件を満たすことができない場合が多い。日本語力が極めて低い留学生は新規渡日者がほとんどだが、新規渡日の場合、来日直後から、新しい環境になれる間も無く、課程での専門科目の履修、研究活動に取り組まなければならない。また、4.3.で、修了率は日本語力が低いレベルよりも高いレベルの科目の方が高い傾向があることが分かった。つまり新規渡日の日本語未習者は、日本語既習者よりも心身に大きな負荷がかかることが予想される。

このような状況で、日本語未習者が十分な時間と労力を割いて新しい言語の学習に継続

して取り組むことは困難であり、2年間の研究活動と並行して企業が求めるN1、N2レベルまで日本語力を向上させることは不可能に近い。しかしながら、初級終了程度まで日本語力を向上させることは、学習意欲の維持と学習スケジュールの工夫によって可能な目標なのではないだろうか。

国際連携推進機構では、第1学期、第2学期に日本語学習の意欲を維持しながら継続できるように、2021年度に3つの試みを始めた。

一つ目は、日本語1、日本語2の授業形態をオンデマンドと対面の併用としたことである。新型コロナウイルス感染拡大により新規渡日ができなくなり、オンラインでの日本語科目提供を決めた。これを機に、2021年後期、2022年前期に授業時間に参加する形態と、時間を固定せずオンデマンド教材に取り組む形態を組み合わせるコースを始めた。また授業時間の出席が成らない場合には、特定の課題を提出することで出席点の一部とすることにした。

二つ目は渡日前日本語教育の実施である。日本語学習へのモチベーションを維持できるように、2021年10月入学者を対象に、ひらがな、カタカナの学習を中心にオンライン渡日前日本語教育を試行した。日常会話ができても、読み書きができない場合、内定率が変わることが報告されている（廣瀬・植田 2011）が、日本語は文字の種類が多く、文字学習に多大な心的負担を感じる留学生が多い。ひらがな、カタカナ既習で来日することで、日本語学習への心的ハードルが下がり、漢字学習へ円滑に進むことを期待した。残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大が収まらない状況で、2021年度は第1学期中の渡日は成らなかったが、オンラインでの日本語科目受講においては、例年よりも修了率が高い傾向にあった。2022年10月入学者を対象に2回目の渡日前日本語教育を実施したところだが、2021年度とは異なり来日してからの日本語科目受講となる。今後、渡日前学習の効果を丁寧に検証する必要がある。

また、3.で述べたが、表2に挙げた科目を大学の正規科目である全学教育科目とし、大学院生が学部開講科目として単位を修得できるように、2016年度に大学教育センター・国際交流センター（現国際連携推進機構）の規則改正を行った。修得した単位は、卒業単位に算入はされないが、その他の単位として成績表に記載されるため、日本語能力試験など受験していない場合にも、日本語力の証明手段として活用できる。

三つ目は、日本の就職事情や日本企業が求める日本語力などを具体的に伝える試みである。入学前の9月にオンラインによる進路ガイダンスを実施し、また来日後に実施する新入留学生オリエンテーションにおいても、日本企業への就職にはJLPTでN3以上は不可欠であり、そのためには日本人の友達を作ったり、交流活動に積極的に参加したりすることが有効であることを伝えている。

2022年度からは、静岡大学が実施する「留学生就職促進プログラム」が文部科学省より認定を受け、所定の日本語科目とキャリア科目を受講して単位を修得し、インターンシップに参加した学生には優先的に学習奨励費を割り当てることになった。日本語科目の単位修得が奨学金受給条件の一部となったことで、日本語学習に積極的に取り組むことを促す。

スタートしたばかりの試みが多く、現時点ではその効果の検証までには至っていないが、静岡大学では英語コース在籍の博士留学生も、日本語未習、または日本語力が低いまま入

学し、研究と日本語学習の両立が困難だという、修士課程の留学生と同じ課題を抱えている（袴田 2016）。日本企業への就職を意図する留学生を含め、理系大学院に在籍する留学生の日本語学習動機が、これらの試みによって教務面、経済面から強化され、課程を問わず日本語学習の促進につなげたい。

## 7. 今後の課題

静岡大学の理系修士課程は、2015年度の改組を機に10月入学の英語コースにABPを取り込み、アジアからの留学生の受入れを本格化させた。英語コース開設によって、静岡大学の留学生数が大きく増加し、キャンパスで留学生を見かけることが日常の光景となり、日本人学生にとっては、同じ研究室で留学生とともに研究に励む機会が増加した。

しかしながら、日本語力が低い留学生は日本での就職を希望しても、就職活動で苦戦が続いており、卒業後の進路に制限がかかってしまう可能性が高い。高度人材として留学生の採用を予定している企業は「博士卒（理系）」よりも「修士卒（理系）」の採用を希望している（クオリティオブライフ2012）にもかかわらず、総科研を卒業した留学生が理系の高度人材として活躍する機会を得にくい現状は、非常に残念な状況だと言わざるを得ない。日本語力が高ければ内定を得られるわけではないが、日本語力が高ければ、進路の幅を広げることができる。2年間という限られた時間の中で、研究活動の遂行とともに日本語学習意欲を維持し、継続して日本語力を向上させられるよう、2021年、2022年にいくつかの試みをスタートさせた。今後は、これらの試みの効果を検証し、よりよいコース設計の一助としたい。

（注1）本稿では留学生対象の課程を取り上げるが、日本人学生向けには、「理工系の専門性に経営学的思考、文系の専門性に理工学的思考をあわせ持ち技術と経営を俯瞰でき、アジアを中心とする海外で活躍する中核・中堅人材の育成」することを目的に学士課程・修士課程において副専攻課程（学士・修士）を設置した。

（注2）スリランカ、ネパール、インド、タイ、ラオス、マレーシア、モンゴル、バングラデシュ、中国、インドネシア、韓国、シンガポール、フィリピン、ミャンマー、ベトナム、台湾国籍を有する入学者をABP留学生として定義し、受験料（30,000円）・入学金（282,000円）・1年目授業料（535,800）の不徴収と、生活支援金（40000円×12ヶ月）またはJASSO奨学金（48000円×6ヶ月）の支援を受ける。

（注3）予備教育として国費留学生が、また研究生が受講する場合は、国際連携推進機構「日本語教育プログラム」として受講する。

（注4）予備教育として国費留学生が、また研究生が受講する場合は、国際連携推進機構「日本語研修コース」として受講する。

## 参考文献

クオリティ・オブ・ライフ（2012）「日本企業における高度外国人材の採用・活用に関する調査」『平成24年度 アジア人財資金構想プロジェクトサポートセンター事業報告書』

- 田崎敦子・越前谷明子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝（2010）「理工系大学院における日本語教育プログラムの成果と課題—英語で研究活動を行う留学生を対象に—」『多摩留学生教育研究論集』第7号, pp.23-29
- ディスコ（2021）「外国人留学生／高度外国人材の採用に関する企業調査」  
<https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2022/01/2021kigyou-global-report.pdf%20>  
（2022年10月1日閲覧）
- 袴田麻里（2016）「博士留学生の日本語学習」『静岡大学国際交流センター紀要』10号, pp.29-41
- 廣瀬幸夫・槌田和美（2011）「理系留学生の内定状況と内定を得にくい留学生のための支援方法」『留学生教育』第16号, 留学生教育学会, pp.47-56
- ライアン優子（2014）「博士課程における外国人留学生の受け入れに関する調査」『静岡大学国際交流センター紀要』8号, pp.81-102
- ライアン優子（2018）「修士課程の英語プログラムに在籍する留学生を対象とした進路希望調査と支援体制構築の取組」『静岡大学国際交流センター紀要』第12号, pp.37-49
- ライアン優子（2019）「日本語初中級の理系修士課程留学生の進路希望傾向」『静岡大学国際連携推進機構紀要』第1号, pp.71-85

静岡大学国際連携推進機構教授

## Japanese Language Study for International Students on STEM Master's Degree Programs

HAKAMATA Mari

This paper examines the enrollment and attendance of ‘Science, Technology, Engineering and Mathematics’ (STEM) international master students in Japanese language courses in order to improve the effectiveness of these Japanese language courses. International students belong to both of English taught program and Japanese taught program.

International students understand that Japanese language skills are very important and enroll Japanese language courses in their first semester. But a half of them don't complete the course and remain at a low level of Japanese proficiency. This suggests that it is difficult to balance research and Japanese language study. On the other hand, this survey shows students who success to complete the course in their first semester tend to continue studying Japanese language afterwards. Shizuoka University Organization for International collaboration started several trials to make students keep motivation and complete the courses. We have to verify the effectiveness of each trial to improve the courses.

### 【Keyword】

STEM international master students, The first semester, To keep motivation, To balance research and Japanese language study